

1 事業の名称 平成28年度発達障がい児担当指導者内地留学

2 留学先の名称 三重県立小児心療センターあすなろ学園

3 研修主題

特別支援教育を推進するにあたり、とりわけLD（学習障がい）・ADHD（注意欠陥障害／多動性障がい）・高機能自閉症等の子どもに対する指導・支援について専門的な知識及び技能を高め、地元市町において保健、福祉、教育の連携を視野に入れた、子どもの成長過程に応じた途切れのない支援を行うための指導力を身に着けたいと考えた。そこで三重県立あすなろ学園が実施する「みえ発達障がい支援システムアドバイザー研修」の受講を希望した。研修を経て、将来にむけて目指す姿は次のとおりである。①志摩市の「こども家庭課」と連携して地域の園・学校での特別支援教育を推進することができる。②志摩市の各保育所・幼稚園で行っている「CLMと個別の指導計画」の継続・定着化を進めるとともに、小学校・中学校での継続した支援につなげるための会議を企画・運営できる。③途切れのない支援につなげることができるように、志摩市において統一した小学校・中学校の特別支援教育アセスメントシート素案の提案ができるようになる。さらには、④保護者に対し、適切な指導・助言をするとともに、必要に応じて専門機関や福祉サービスにつなげることができる。以上を目標に研修を進めてきた。

4 研修成果の概要

2016年度4月より1年間研修させていただいた。研修内容は学園にて、療育活動、病棟研修、分校見学、市町での「CLMと個別の指導計画」巡回指導などであった。また県内の福祉施設や学校等での視察、三重県児童相談センター主催の「児童福祉に関する指定講習会」の受講もした。

入院児がやがて地域で暮らすことができるようになるために、治療は医療・福祉・教育が三位一体となって進めていくチーム医療であることを学んだ。受診した児が治療で得たスキルや生活習慣を家庭や学校、地域に汎化していくことを大切にしていることを1年間の研修を通して学んだ。そのシステムは一定期間後のアセスメントの後にプログラムを立て、治療目標へアプローチしていくという過程を大切にしていた。また他の科の病院と異なって、本人の治療という行為と同時にその背景にある家族の病理や学校環境もつきつめ、改善していくという過程があるということも研修からわかった。地域に子どもが戻ったとき、子どもと家庭、学校をつないでいくか頭に置いて職務についていきたい。研修でのオリエンテーションや実務研修のなかで特に心に残っているのは以下の3点についてである。

●「どうすれば子どもたちの行動が変わるのか」という視点を常に持ち続けること。

日常生活の中では子どもたちの問題行動やスキルの不足に注目しがちであるが、その場面での子どもの言動を制するより、適切な行動を増やすサイクルを作るべきだということ学んだ。そのために接する大人の中で誰がキーマンになるとよいかを決めること、その人を中心に気になる場面での大人の対応を統一していくこと。問題行動の場面で判断するのではなく、伸びるところはどこなのかを見つけて、支援し変えていくことを大切にすることを学んだ。

●行動の背景にある「要因・気持ち」の分析が支援の基盤である。

最も力となった経験は指導計画を作る際の「要因・気持ち」の分析である。過去に私が学校内で進めていた特別支援委員会ではその分析が浅いものであったと反省した。理解度の点、モチベーションの点など年齢が上がっても、子どもの困り感でぶつかるものは成長段階に伴う程度の差はあっても、その内容は大きく変わることはないのではないかと思う。実態からすぐに支援法に結び付けるのではなく、十分に考えられる要因や子ども気持ちを検討してからでないと、教師の思い込みの指導に陥りやすいことも感じた。またそれに伴って、より適切な要因・気持ちを感じ取ることが出来る力をもてるよう今後も研鑽していきたい。

●アドバイザーとして人とのつながりを大切にする！

発達障害の治療には、退院後の生活基盤が要になるという話があらゆる場であった。本人のことだけでなく、家庭背景が厳しく、適切に育つ環境にない場合も多い。その子どもを支援するためには、その家庭がもつ課題にも向き合い、支援の手段を模索することも必要であると知った。それにはどこにどのような機関があるのか、そこにどのような人がいるのかを知っておくのは財産である。この園内の研修だけでなく、県内の福祉施設の見学や地域での健診や療育活動の取り組みなどを研修で伺うことができたのは貴重な経験であった。